

明治期における江戸洋学観の展開

藤 原 暹

先に「洋学の歴史思想」と題する拙論¹⁾で、いわゆる「洋学」(江戸時代の蘭学発展)の歴史観²⁾は藤田茂吉の『文明東漸史』において結晶し、以後明治20年代には「洋学」への反省と批判からその史観も変更せざるを得なくなる事を指摘した。

こうした指摘をあえて行った理由の一つは、佐藤昌介博士の近著『洋学史の研究³⁾』において、「正統派蘭学系の経世論の系譜は、もちろん畢山長英をもって絶えるのではない……正統派蘭学の最後にして最良の継承者(は)福沢諭吉であった」という指摘がなされていたからである。ここで「正統派蘭学」とは、佐藤博士によると、

- (1) 渡辺畢山、高野長英にみられる近代自然科学思想(実理と実用の連続性の認識)の持主で、
- (2) 上記の新思想の技術的实践、つまり政策論への適用者である。

この(1)と(2)とは不可分な関係にあり、これまた「正当派蘭学」者の要件とされての立論であった。ところで福沢諭吉自体は一体江戸時代における蘭学をどのように把えていたのであろうか。

1 諭吉の蘭学把握

諭吉が安政2年(1855)22才で大坂緒方洪庵の適塾に入門し、蘭訳学を学び、安政5年、25才で江戸に上り藩邸内に蘭学塾を開き、翌年独学で英語の研究を始めた江戸期洋学の体験者であった事は周知の通りである。ところで彼は江戸時代の洋学に関して如何に記述していたのであろうか。主たるその記述を列举すると以下のようになる。

諭吉の江戸洋学(蘭学)の記述過程

年 月	題 目「」著書「」論考	年 月	題 目「」著書「」論考
慶応4	「慶応義塾創立之記」	明治22.5	「洋学の命脈」
明治5~9	「学問のすすめ」	" 23.4	「洋学先人への贈位」
" 8	「文明論之概略」	" 30.1	「築城書百爾之記」
" 12.7	「民情一新」	" 30.1	「物理学」
" 16.9	「洋学の地位高尚なるを要す」	" 30.9	「文明先輩の功勞忘る可からず」
" 16.9	「通俗医術論」	" 30.10	「福沢全集緒言」
" 18	「杉田成卿先生の祭典に付」	" 31.9	「奉祝与専斎先生選暦」
" 19.2	「余が洋学に志したる由縁」		

まず『学問のすすめ』では「洋学」に関する記述は少ないが、そこでは、我日本の文明も、その初は朝鮮シナより来り、爾来我国人の力にて切磋琢磨、もって近世の有様に至り、洋学の如きはその源遠く宝暦年間に在り。蘭学事始という版本を見るべし。輓近外交の交際始まりしより、西洋の説漸く世上に行われ、洋学を教える者あり、洋学を訳する者あり、天下の人心更に方向を転じて、これがために政府をも改め、諸藩をも廢して今日の勢いになり、重ねて文明の發端を開きしもこれまた古人の遺物、先進の賜と云うべし³⁾。

と記されている。論吉は近世の洋学が宝暦年間以後の遠い源を持ちながら、主として、「輓近外交の交際始まりし」という嘉永年間開国和親以後「世上に行われ」「人心を転じ」「政府を改め」文明の進展に寄与した事を認めている。しかし、開国以前の実体には立ち入ろうとしていない。この点は『蘭学事始』を「見るべし」とした。彼が杉田玄白『和蘭事始』の写本を手に入れ、明治2年に『蘭学事始』として刊行した事は周知の通りである⁴⁾。彼は、その刊行本に江戸洋学の内容を托してそれ以上は触れなかったものと考えられる。この事は彼の蘭学から英学への転向にもみられる如く、蘭学とその系譜に現実的意味を発見していなかったという事にもなる。ここで明治8年の『文明論之概略』をとりあげてみる。この書の「第九章日本文明の由来」で彼は「西洋の文明は其人間の交際に諸説の並立して漸く相近づき遂に合して一と為り、以て其間に自由を存したるものなり⁵⁾」とし、それに対して日本では、江戸時代政府の「権力の偏重」をみたので学問は「政府の内に起りたるの事なり」と捉えた。この事から彼は江戸時代においては、

国内に学者の社中あるを聞ず、議論新聞等の出版あるを聞ず、技芸の教場を見ず、衆議の会席を見ず、都て学問の事に就ては毫も私の企あることなし。遇ま碩学大儒家塾を開て人を教る者あれば、其生徒は必ず士族に限り、世禄を食て君に仕るの余業に字を学ぶ者のみ。其学派も亦治者の名義に背かずして、専ら人を治るの道を求め、数千百巻の書を読み了するも官途に就かざれば用を為さざるが如し⁶⁾。

という実態であったとした。論吉はこの章で「洋学」に関して全然ふれていないので、儒学、仏教学についてのみ以上の如く評したとも考えられるが、「日本文明の由来」に関して積極的に「洋学」の意義を認めていなかった事は事実であろう。この点を更に『民情一新』で考えてみたい。この書の緒言で、彼は「唯漠然これを文明開化と称して其文明開化たる所以の事実を指示明言するに非れば之を学び之を採用するに当て大なる過なきを期す⁷⁾」と述べ、文明開化の「所以」を説こうとした。そしてその「所以」を五点にわたって、

1. 保守と進取の主義の相対的關係による。
2. いずれの主義によるかはその社会の「種族」の問題である。

3. 「蒸気船車，電信，印刷，郵便の四者」・1800年代の「発明工夫」の「利器」が社会の心情を変動させた。
4. 「利器」を利用した勢力が進取の勢力である。
5. 「今世に於て国安を維持するの法は平穩の間に政権を受授するに在り」

と説明している。この間に「保守に過ぎた」江戸期の洋学について、

宝暦明和の頃、前野蘭化杉田鶴齋先生の流が始て荷蘭の書を講じたるが如きは當時に在て奇怪の最も甚しかりし者ならんと雖も後世に至りては……彼の蘭学なるものも時勢困難の其際に尚これを捨ずして天保弘化の頃は翻訳出版の書も甚だ少なからず文学の進歩以て知る可し。蘭学起原の事は蘭学事始と云ふ杉田氏蔵版の書に詳なり⁹⁾。

と述べているに過ぎない。ここでも江戸期の洋学が文明開化の「所以」として特に注目を集めてはいない。言うまでもなく論吉は、明治の開化期の中で「西洋文明に浴し營に其事を聞見したるのみに非ず、現に其事に当て其事を行ふたる者」として、現実の「実験」者として生活していた訳で、過去の江戸期洋学に目を向ける関心や余裕が生じなかったとも考えられる。たしかに後年になるに従って、過去の洋学への跡づけを行う度合や内容が増している。ではそこで何がつけ加えられたのであろうか。

明治16年9月の「通俗医術論」では、「我日本国に西洋医術の開けたるは今を去ること百余年明和の頃に前野良沢、杉田玄白など云へる諸先生を始めとして引続き大槻、宇田川、坪井尚は近世に至りては伊東、箕作、杉田、緒方、戸塚、林、佐藤等の諸大家が専ら斯道の為めに力を尽し身を苦しめ家産を傾け甚だしきは時の勢の為に命を危うして尚ほ其志を屈げず先進後進相伝へて以て王政維新の時にまで西洋の医術を我日本に全うして其名を落さざりしことなり。⁹⁾」とし安永3年玄白が「ターヘルアナトミカ」の翻訳に着手して以来の和蘭医学の展開を述べている。特にこの『解体新書』以来「三十余年を経て文化元年大槻玄沢先生これを増補訂正して再版した」『重訂解体新書』にふれ、その附録にある大槻玄沢の医論について「我輩今日より之を見て敬服に堪へざるもの多し」とその一章を掲げている。では如何なる点が「敬服に堪えざるもの」であったのか。

(千百年來の和漢法が)元々人の体内にある臟腑其外脈管神經等の形も知らず、性質も知らず、又其働も知らず、体内に如何なる差響くやの關係も知らず、差向き外面の容体にのみ眼を着けて脈を窺ひ腹を案で舌を見、手足を撫づる。

もので、譬えば、

時計の内の機関を知らずして其外面の針の止まる頃又狂ふを見て……之を修覆せんとする者の如し¹⁰⁾。

これは西洋医学(大槻玄沢の医論)で、最も忌む所なり、蓋し固無病は人身の常にして病は変なり固有を知らざれば病変を論ず可らず。

というものであったが為という。つまり諭吉は病理と処法との一体的把握を認識した玄
沢に感嘆したのである。この点は佐藤昌介博士の指摘する所が当たっている。

つまり、福沢の考える近代西洋自然科学の認識と江戸時代蘭学者の認識の一致を発見し
又そのように江戸蘭学を把えたのである。こうした彼の跡づけは、その後医学の面から広
く物理学に及び、「物理学」という一文に結晶する。そこでは、彼等江戸蘭学者が、
文明の入門の道を開きたる先人の刻苦忍耐は云ふに及ばず。特に迂老の大切と思う所は
其入門の道を物理学よりしるの一事にある¹¹⁾。

と述べ、

我文明の基礎堅固にして其由て来る所、高尚なりとは実際の事実に証して疑う可から
ず¹²⁾。

と文明開化に尽したる洋学の「高尚さ」を物理学に求めた。こうした受けとめから、諭
吉は、

徳川時代……(洋学の)初め政論、商論、経済論等人事無形の論理を以てして其書を訳
し其説を唱ふるか又は下流細民の内外交際よりして彼の新事物を輸入し事が如きあら
んには……新旧両輪相互に激して……洋学の運命に必ず断絶したるや又疑を入れず。然
るに実際は之に反して初め医学よりして漸く物理の区域に達し到る所に敵を見ずして却
て有力なる友を得たるこそ幸なれ¹³⁾。

と先人が、偶然にせよ「有形の論理」(形而下)より入った事を幸運としたのである。
彼は「洋学の命脈」という一文で、維新の争乱下洋学が中絶したにもかかわらず、

我洋学の行年百十九歳なるものをして一日も其命脈を中絶せしめざりしは本塾(慶応義
塾)の名譽にして其名譽は特に今日此席に会同したる吾々に属して日本國中他に争ふも
のある可らず¹³⁾。(こうした意識は「慶応義塾創立之記」にも見られ一貫したものであ
ったと考えられる)

と自分達のみが江戸期洋学の伝統を受けついただと自讃した。この諭吉の言は当初江戸期
洋学にさしたる記述を行わなかった彼の大きな拡充ではあったが、そこで江戸期以来継承
したと認識されたものは、翻訳学による形而下=自然科学精神そのものであった。渡辺華
山や高野長英の名前が出てくる訳でも、自然科学精神が経世論に反映していたと把えても
いない。佐藤博士が諭吉を江戸期洋学の「最良」の後継者とするには矛盾がある。

この点も含めて、次に諭吉門下の一人藤田茂吉の江戸期洋学観を考えてみたい。

2 茂吉の洋学史観

藤田茂吉が『文明東漸史』を出版したのは明治17年9月であるが、自序によると、こ
の書執筆のためには「材料ヲ撮拾スルニ着手セシ日ヨリ起算スレバ幾ンド五六年ヲ費ヤセ

り¹⁴⁾」とする如く、明治11年頃からとりかかったようである。つまり論吉の『学問のすすめ』の出版以後『民情一新』の出版以前である。

『文明東漸史』の構成、内容、思想構造等については別稿¹⁵⁾に論じたので重複を避けたいが、少なくとも前述した『学問のすすめ』『民情一新』等の論吉の認識とは量、質共に大きく異っている。

まず、茂吉は執筆のための「材料」として新井白石『采覧異言』以下26書の引用書目をあげ自説の「事実ノ原ク所」を明示している。しかし、この中に論吉がくり返し紹介した『蘭学事始』は入っていない。この理由は明確には分らないが、茂吉にとって『蘭学事始』の内容自体、江戸期洋学の把握の上で主たる意味を有していなかった事丈は言い得る。

茂吉の記述の中心が、華山、長英の事跡の発見にあり、天保期蛮社の獄の把握にあった訳で、引用書目中からの「材料」を示せば、「一渡辺華山著駄舌小記同或問、一同人著慎機論、一高野長英著蛮社遭厄小記、一同人著夢物語、一同人著鳥の鳴音」等が重要な意味をもっていた。

では、茂吉はこれら江戸期にみられる洋学者の記述を如何に受けとめ自説を展開したのか。茂吉が「事実ノ原ク所」とした華山長英関係の6書目の内容から考えることにする。『駄舌小記、同或問』というのは華山達が天保9年3月江戸参府のオランダ商館長ニーマンとの対談をし、それを華山が筆記したものである。そこではオランダ以外の国の学術に質問が及んだ時、

学問芸術の盛なるは独逸国、次に払郎察にて、余国に比すべきものなし。唯大貌利太泥亜は機巧盛に行はれ西洋諸国工匠踵を接し、其都竜動に輻集するが故に他国は機工に事を欠くばかりに候。……ストームマシネと呼ぶ奇器を創始せり……ヒュールマシネと申候。……己にストームマシネと申書有之候。これには其製造委しく記申候¹⁶⁾。

というイギリスにおけるストームマシネ（蒸気機関）の発明が述べられ、「新奇の器を製造する」に至る欧州各国の自然科学技術の習得のための学校制度、学校での「歴試」「験証」その成果の「刊布」等を通して「一の発明あれば、速に一洲の惣法となる」状況が述べられている。『慎機論』『夢物語』はこうしたイギリスの登場に対する認識をふまえて、英船モリソン号を幕府の撃攘する非を述べたものである。ただ両書の間「華山は打払令そのものよりもその大前提である鎖国政策を国際政治の現状をふまえて批判しているのにたいし、長英の場合は鎖国体制を是認したうえで、もっぱら打払令の適用に反対している¹⁷⁾」という相違がある。この両書が因となって天保10年幕政批判の罪で華山、長英は蟄居、永牢の判決を受けた。茂吉の引用した『蠻社遭厄小記』『鳥の鳴音』は長英と共に今回の遭厄に至る経過と、無実を述べたものである。前者と後者とは記述量と内容において異なる点があるが、主たる特色は『鳥の鳴音』（『わずれがたみ』とも称する）は直接天保10

年遭厄の状況を述べ、『小記』(略称する)の方は遭厄に至る因としての洋学の歴史的発展、蛮社の成立、守旧派の弾圧等に及んだ点である。茂吉が注目したのもこの書である。『小記』で長英は如何に洋学の発展を把えていたか。この書は「西洋の始て我に通ずる」所から始まる。ポルトガル船の漂着(鉄砲の伝来)以来、信長は西洋人の「人物非凡其説実用多し」故をもって厚遇し「其説に従って城郭を改造し兵器を新製し」「南蛮寺」を建てた。しかるにその「教法専ら愚民を誑惑し人心を団結し遂には国乱の基となるべく見えける」。その後、豊臣、「遂に其教を禁じ」「南蛮人の渡海を許されず」、「只和蘭陀、イギリスはその宗旨異なる由を以て通商せし」めた。徳川時代になって、「特り和蘭の通商を許し……通辞の外は概して蛮書を見る事を禁じ給ひぬ」有徳廟(8代吉宗)の時「蛮書翻訳勅免被仰付」事となり、以後、青木昆陽、前野蘭化、桂川月池、杉田鶴斎、宇田川榛斎の徒が相ついで翻訳学を継いだ。「文化年間天鑑司高橋作左衛門台命を請て、和蘭の通辞を司天台に召下す」ことになり「蛮学之によりて大に開たり」。しかるに「高橋氏己を慎まず自ら誇りて本邦大地図を蛮人に寄与し」「大禁を犯すの罪あるによりて重刑に行は」れ、「蛮学者流一時大に畏縮し蛮学頓に衰えぬ」。ところが、「蛮学は有用急務の実学にして……勢ひ休むべきにあらず」、という状況になって、

瑞臯高野長英、学齋小関三英の如き、医事よりして蛮学に入り遂に各名家となるもの山の手に居住し諸生を教導し、諸書を訳述し、博く諸方に交りぬる故、其勢ひ一層を倍加し、或は万国の治乱興廃を詳にせむとて此社に入り(来る)¹⁸⁾

こととなったという。かくして「瑞臯深謀なく直ちに国家の忠言と心得夢物語といふ物を書き認めけるに……讒者機に乗て官に訴へければ……」今回の遭厄となったとして以下「顛末」を記した。そして「瑞臯は古林子平海国兵談を著したる旧例に準じ陪臣なれば其主君に永預と被=仰付=処町医なるによって永牢被=仰付=」¹⁹⁾という事になったという。

つまり、蛮学(蘭学)は有用急務の実学であり、数十年にしてその翻訳学が発展した。やがて医学から「万国治乱興亡」「天算数学」「本草物産」「練兵砲術」「諸般の工技」と及び、一種の実学社中を形成し経世論に及んだ。ところが、「鳥居殿は林大内記殿の次男、大学頭殿の弟なれば儒家に出身して文人なる故蛮学を嫌悪せられるに、近来蛮学頗る旺盛にして上は公卿より下は庶人に至る迄、往々これを賞揚し、儒生といへ共これに心酔する者少なからざるを以て常に不平を懐かれける²⁰⁾。」という学問的対立抗争を生んだ。これが政治の世界に波及したのであると述べた。

長英がこのように把え得たのは勿論当時の江戸における体験と見聞と若干の「諸書を参考²¹⁾」にすることから成ったのではあるが、そのように把えさせる原理がこれまた関与していたと考えられる。その原理とは例えば何か。彼は天保10年の蛮社の獄に先立って、天保3年頃に『漢洋内景説』天保6年頃に『西洋学師ノ説』を記している。前者の「題言」

で彼は、

余、多年、意ヲ平ニシ、心ヲ潜メテ五大洲方ヲ歴観スルニ諸ノ學術技芸ニ於テ、精巧卓絶ナルコト、西洋ノ人ニ及ブモノナシ。蓋シコレヲ彼邦ノ俗、大率直質的ヲ貴ミ、物ニ抛リ事ニ微シテ實際ニ試ミザレバ、手ヲ下シ又口ニ説コトヲ為サズ。……彼邦ノ理ヲ究メ、学ヲ研ノ法ヲ推スニ天文地理測量律曆ヨリ図画器械其他ノ事ニ至ルマデ……人ヲシテ能争テ精微蘊成ヲ發明セシム²²⁾。

と西洋の學術が実測究理をもって成る事を観ており、更に後者では、そうした西洋學術が如何に発展してきたかを歴史的に思考した。

そして、

開闢以来、彼国歴数今ニ到ルマデ、凡ソ五千八百四十年、上古ハ稽フ可カラズト雖モ羅甸ノ盛ナリシ頃、聖賢併ビ起リ学科各々備ハレリ。然レドモ、元来陰陽四行ノ旧説ヲ以テ形以上ノ学ヲ原トシ、形而下ノ学モ此ヨリ岐分スル故ニヤ蒙然トシテ分明ナラザルナリ。此間ニ有力名哲出デ、実験ノ実路ニ則リ法ヲ立テ教ヲ設ルモノ亦少シトセズ。然レドモ旧染ノ古学歴然トシテ世ニ行ハレシヲ以テ世人此ニ泥着スルモノト見エタリ。然レドモ後世人物ノ出ルニ到テ其説実測ニ枕合セザルヲ以テ、疑ヲ生ズルノ間ニ実測ノ学次第ニ行ハレ来ル由テ遂ニ旧説ヲ廢シ新説ニ從テ右形以下学ヲ以テ人ノ所務トシ此ヨリシテ形以上ニ至ルノ学風トナリタリ²³⁾。

と形而上を基にしていた旧説から近代自然科学技術の実理実測を基にした新説が学問的抗争を経て成立してきたと認識した。

いわば長英の「小記」で扱えた江戸期洋学の原理はこの「西洋学師ノ説」にみる学問発展観であり、西洋において発展してきたものを日本の江戸時代の舞台の上に跡づけようとしたものであると言える。

こうした長英の扱えたものを茂吉は再認識する形で『文明東漸史』の主要な部分を書いたであろうことは、その「第七章蘭学及医術の漸進」以下「第十六章志士ノ自尽」迄を一読すれば容易に判明する。「第七章」では長英の扱えたものを「新思想」と表現し「西人ノ思想ヲ表露セル文字ニ接シテ其言説ト相親ムニ非ンバ内部ヨリ発スルノ新思想ヲ求ムルコト能ハ(ズ)²⁴⁾」として江戸蘭学が生じてきた事を述べ、やがて「政府モ今ハ其学問ヲ以テ必要ノ部内ニ置ク」事になったと天文方における高橋作左衛門の事跡を跡づけた。やがてシーボルト事件をみて「西学ハ俄カニ衰退ノ状」を示したが、「実利実益ノ引力ハ人心ヲ誘発」して再び隆盛をみるに至ったという。そして、「是レ実ニ氣運ノ然ラシムル所、野草ノ春雨ニ逢フテ滋蔓スルガ如ク」と長英の文とほぼ同文で意味づけた²⁵⁾。また第八章で、遠藤勝助の事とその社中について述べ、

崑山、長英ノ徒同志者ヲ糾合シ相謀テ一ノ會議所ヲ設ケ名テ尚齒会ト云フ。蓋シ又智識

交換ノ日途ニ出タルモノニシテ都下知名ノ実学者ヲ集合シ当世ノ要務ヲ講論シテ其可否ヲ決スルノ協会ナリ²⁶⁾。

としたのもほぼ長英の『小記』の記述「社会ノ間ニ進動スル」ものの追認識であった。更に長英が「林子平ノ例ニ依リテ其藩主ニ引渡サルベキニ町医者ト云ヘルヲ以テ江戸ノ獄ニ繋ガル²⁷⁾」と自らと林子平の事跡とを同一視した点を茂吉は見逃さず、

抑モ我国ニ於テ、外寇防禦ニ関シテ論説ヲナンタルハ林子平ヲ以テ初メトス。子平寛政ノ間ニ於テ洋人ノ説ヲ叩キ、海防ノ策ヲ講ズ。其卓識驚ク可シ。遂ニ罪ヲ言論ニ得テ禁錮セラレ、冤ヲ吞テ地ニ入ル。其不遇憫ムニ堪ヘタリ。後年華山、長英ノ徒奮フテ外勢ヲ論ジタルガ如キ、隠然其統ヲ継ギンモノナリ²⁸⁾。

と認識したのである。茂吉は長英、華山の前記引用書目にみられる西洋自然科学形而下の学が経世論に展開した事態をそのままの形で受けとめたと言える。してみると佐藤博士の指摘する福沢諭吉を「最良にして最後の継承者」とする事は当らず、むしろ藤田茂吉にこそその位置は在るものと考えられる。

さて、茂吉の『文明東漸史』は江戸期における蘭学者の認識の再確認の上に成ったが、一方茂吉自体の原理をも示していた。それは、

世運ノ改進黨路ヲ遮断セル二大障害ヲ撃破シテ新世界ヲ開発シタルモノハ、水火ノ二力ニ在リト云フベシ。一ハ天然ノ障礙ヲ襲ヒ、一ハ人事ノ障礙ヲ破リテ以テ社会ニ偉功ヲ奏シタリ²⁹⁾。

という「水火ノ二力」つまり「火器」「蒸気機関」という「利器」が「社会上ノ波瀾ヲ激動シテ大變革」を生ぜしめたという。この点華山長英の場合と異なる。先述した『缺舌小記、同或問』において、ニーマンから「蒸気機関」の発明についての知識は得ていた。しかし、そうした「利器」が社会変動の因とは明確には捉えていなかった。茂吉は諭吉と同じくこうしたテクノロジーが「人力之ヲ採リテ天工ヲ在シ大變革ヲ誘起スルニ至ル」と観た。そしてそこでの変革を「米國ノ水師提督辺理ガ船ヲ日本海ニ泛ベ我武陵ノ仙境ヲ窺ヒ」開國に至らしめた事に求め、封建制度の打破の因とした。茂吉において、蒸気機関が「其勢力ノ大ナルヲ以テ鉄石ヲ碎ク可ク、以テ蘭糸ヲ紡績スベシ。以テ印刷ニ施スベク、以テ製造ニ用ユベシ³⁰⁾」と認識されても、それが社会の生産様式の変化を生じさせつつあるものという認識には到達していない³¹⁾。この事が江戸洋学観にも反映していたことは言うまでもない。更にこの点を含んで以後の洋学観の展開を考えてみる。

3 「理学の思想」をめぐる諸論

徳富蘇峰(1863-1957)は明治18(1885)年に『第十九世紀日本の青年及其教育』(後に『新日本之青年』と改題)を出版し、広く青年読者を引きつけたが、この書では「洋学」は次

のように把えられている。

封建政府ヲ顛倒シタルモノハ誰レノカゾ。新制度ヲ創立シタルモノハ誰レノカゾ……其ノ源ニ溯リテ論ズレバ、却テ泰西学問ノ胎内ヨリ孕出シタル、一ノ呱呱乳ヲ求ムルノ赤子タリシニ非ズヤ³²⁾。

と「泰西学」という「新学問」が明治維新をもたらしたことを指摘する。この傾向は「旧学問」たる東洋学を押しつけたが、その原因は「外国トノ交際自由ナルガ故ニ」入った「郵便、鉄道、汽船、電信ノ新発明」にあったという。その理由は、

旧学問ニ於テハ、其ノ重ナル価値ハ仁義道德ノ一隅ニ偏シ、開知的ノ点ニ於テハ学識ニ非ズシテ……其ノ講ズル所ハ形而上ノミニ止リ。形而下ノ事物ニ関シテハ一切之ヲ閑等ニ附シ去リシ³³⁾。

こうした旧学問の実態であったために「勢極レバ必ズ変ズ」る如く「我が今日ノ学問社会ニ於テハ其全カラ挙テ知識ノ一点ニ熱注」することになった。こうした洋学の「偏知性」を批判する蘇峰は「維新ノ第一ノ改革」に対して「知識界第二ノ改革」を唱えたが、そこでは当然杉田玄白の『蘭学事始』や福沢諭吉は批判されるのであった。「福沢翁」なる一文で、彼は

福沢宗の入門は胃腑充満主義也。入るものは此より入る。知らず出るものは何れより出ず。……翁は力を……第一義となす……是拜金宗の称ある所以。物質的生活に直接の関渉を有する科学に就ては、翁は最も多くの興味を有す。……要言すれば人間の宇宙に於る位地に就いては翁は加藤弘之氏と殆んど其評価を一にするに似たり³⁴⁾。

とその物質主義、科学主義の偏向を批判した。また『『蘭学事始』を読む』では、「泰西学問開山の重なる一人杉田玄白」について、「泰西医学の精細確的」態度により『解体新書』を訳述した点を高く評価しながらも、

其の心事の極めて高潔にして真の学者たるの品性を発揚するものの如し。

と品性の高潔さに注目し、また、

吾人が前賢に学ぶ可き所は実に此の心にあるのみ、実に此の心にあるのみ³⁵⁾。

と私心なき精神的態度において評価した。こうした傾向は蘇峰個人の思想にも依ったが、明治10年代から20年代にかけてのいくつかの「理学の思想(精神)」をめぐる論争にもみられる時代的傾向でもあった。例えば『東洋学芸雑誌』の発刊「緒言」をめぐる論争であり、また『日本人』創刊号の「日本学問ノ方針」をめぐる論争である。前者では、

我邦人ノ理学ノ思想ニ乏シキハ識者ノ常ニ憂フルトコロナリ。故ニ之ヲ救ハンカ為メニ此雑誌ニ理学ニ関係スル文章ヲ掲載シテ性質及ヒ功用ヲ世ニ明ニセンコトヲカメタリ。……云々³⁶⁾

と明治14年創刊号の「緒言」にあるを田口卯吉(1855-1905)が反論した。彼は、

日本の社会において理学の思想乏きには其乏しき原因即ち天法ありて俄に改をし得べきにもなく……若し果して社会事物の間口天法の行はるゝを知るの理学者ならば決して日本人の理学の思想に乏しきを憂ひざるべく之を憂ふる程の無学者ならば決して理学者とは称すべからず³⁷⁾。

と「理学の思想の乏しき」社会的原因の追求にあるとし、また

社会に天法あるは地球の行道に天法あるが如し、天文学者は地球をして行動を改めしむる能はず³⁷⁾。

と理学者自ら自然科学法則そのものを改変することはできないとした。田口は更に同誌中の井上哲二郎「学芸論」に及び、

英人某嘗謂余曰日本之人 有機智而無耐力 巧于模倣而拙于創造。後遍讀伝記 始知其言之不我欺也……未有自画奇策妙術而大興富国強兵之本者可堪遺憾乎哉。大抵世儒唯講支那所講 以為己学……云々³⁸⁾

という部分を批判した。これに対し、井上は「答東京経済雑誌」として、

(田口は)平生模倣ノミニ従事スルカ故カ、若シ模倣ノミニ従事スルコトガ国家ニ益アルコトナリシナラハ、各国皆創造ヲ廢シタリシナラン 各国皆創造ヲ廢シタリシナラバ豈今日ノ如キ郁々タル文明ノ光輝ヲ見ルヲ得シヤ……云々³⁹⁾

と日本独自の理学の思想の創造を主張した。このことは更に明治21年発刊『日本人』の第1号に載った杉浦重剛(1855-1924)の「日本学問ノ方針」では、

我日本人ノ学問ノ方針ハ我長短ト彼レノ長所トノ取り合セテ最モ注意シテ計画スルニアリ……云々

と拡大化する。この杉浦の論に対して西村貞は将長補短の精神を育てるには、「理学的精神ニ拠ラザレバ調ハヌコトト考ヘ侯 日本固有ノ長ヲシテ益々長タラシムルニモ亦此ノ精神ニ拠ラサルベカラズ……云々⁴⁰⁾」と述べ、宮崎道正は「実力養成論」で、

吾国維新以来……二十年間にありて此の如く文化發達の形状を現出せるは各国人の驚嘆する所なり。然り而して此後に猶益進んで有形上の整頓を計り国家の威厳を保ち国光を四方に示さんことは是れ最大須要の事なり。……吾邦今日の要務は、単に外形上の整頓を謀るにある乎、否……濫りに外形上の事にのみ注意し更に実力の養成を顧ざりしが故に(かの羅馬帝国は)亡国の慘状を見るに至りしなり。……勉めて事物の基本たる国力を養ふこと須要なりとす⁴¹⁾。

と外形上の文明の発展は終り、内部「民力増殖」の転換を説いた。こうした諸論の出現は「洋学」自体の受けとめ方の変更をもきたした。

4 山路愛山の江戸洋学観

諭吉や茂吉の史観は文明史観と言われるが、それが明治20年代の民間史観に受けつがれた。この代表的史家が山路愛山(1864-1917)であろうことはすでに指摘されている⁴²⁾。では彼において江戸洋学はどのように受けとめられたか。

彼の江戸洋学観は、まず次の「国民之友」に掲載した諸論考に表われる。

明治25年10月～12月	「近世物質的進歩」
” 26年11月～12月	「徳川時代の民政」
” 25年9月～10月	「平民的短歌の発達」
” 26年10月～12月	「論史漫筆」
” 26年11月	「科学」
” 27年4月5月	「歴史の話」
” 29年8月	「戦国武士を論ず」

まず「近世物質的進歩」をみる。これは、

近世封建制度三世紀を以て其外形の単調なりしがために物質的精神的に少しの変化なかりしものなりと臆断するものあらば、そは進歩の大法を信ぜざるものなり⁴³⁾。

という立場から近世における物質的進歩を跡づけたものである。この近世物質的進歩を観察する端緒として彼は「外国交際が近古三世紀の間、如何程本邦人の生活に進歩を与へしかを観察すれば」と明治17年7月刊行の外務省編纂外交志稿年表によって外来科学技術文明伝来の事実を表示している。服部之聡氏はこの点を注目し、「不完全なデッサンにすぎないものではあるが、……史学方法上の意義からいえば画期的なものと言ってよい⁴⁴⁾」と言う。明治17年7月に刊行された政府の資料に基いて愛山は洋学を觀ようとした訳であるが、同年9月には前述した茂吉の『文明東漸史』がすでに発刊されていた。愛山はこの「近世物質的進歩」は勿論の事、他の論考においても茂吉の説にふれていないので、おそらく茂吉『文明東漸史』を読んでは居なかったものと推定される。(なお茂吉は明治25年に夭逝している。)

さて愛山は外来文明導入の年表では「我国の物質界に変動を与えたる」実情が不明なので「説明を加ふべし」として以下次の如く自論を述べる。

蓋し我が日本人の日用品及び食料品に就て其重なるものが多くは近代において外国より来りしものたるの事実は著しきことなり⁴⁵⁾。

として、まず「衣服の原料として平民間に専用せらるる木棉」が「日本全島に播がりし時絹布、麻布の製造に著しき衝動と変革とを与へたる」かを説く。更に同じ見地より「砂糖」「甘蔗」「馬鈴薯」を論じ、鉄砲や築城術の輸入に及んでいく。まず彼の特色は外来技術が日本の「平民」の生活を如何に利したかにあった。この点は前節で考えた茂吉にな

かったし、彼が、「若し我が歴史家にして精細に、我が人民の生活に注意したらんには……猶（その）痕跡を認むべし」と言う如く当時の歴史家に着目されていなかった。愛山に多大の影響を与えたと言われ、また彼自らも高く評価した田口卯吉は代表作『日本開化小史』で人民の生活には注目したが、外来文明、特に科学技術の影響についてはほとんどふれていなかった。

次に特色の第二は、

銃砲の我が国に入りしより以来、兵陣の方式全く一変せり⁴⁶⁾。

とし、

徳川氏の封建は城と銃砲とに依りて支へられたりと云ふも可なり。要するに封建も亦外交の結果なり⁴⁶⁾。

と徳川封建社会の成立そのものが外来文明の作用と捉えた。この第一の特色と第二の特色は、更に、一見すると、

不幸にして徳川氏の封建的鎖国政略は此の滔々として入り来れる世界の大勢より、我国民を隔絶せんとせり⁴⁷⁾。

とも見えるが、「自ら我が文明の進歩を誘へ」るものがあつたと捉えた。つまり、〈各藩の富国策と国産品の考案をはじめ、「大都市」の「市民」の発達を促した。〉と捉えた。

こうした銃砲の導入による封建社会の形成は、後に、「現代金権史」で

銃砲の発明以後、社会の組織に特に大変動を与へたるものは蒸気、電気を大機械大製造に応用する近世科学的の進歩なり。此進歩は恰も銃砲の発明が武士を城下に集めたる如く労働者を工場に集めなり⁴⁸⁾。

と捉えられるように愛山の外来文明受容観の骨子であった。

茂吉の『文明車漸史』にも銃砲の伝来は注目されていた。この点愛山と比較してみたい。

茂吉は「世界ノ改造進線路ヲ遮断セルニ大障礙ヲ撃破シテ一新世界ヲ開発シタルモノハ水火ノ二力ニ在リト云フベシ」と「水火二力」に文明の根本的な起因を求めた。「水火」とは、前節にも述べる如く、「蒸気機関」と「火器（火砲）」を指し、「二大障礙」とは「天然ノ障礙」＝交通障礙と「人事ノ障礙」＝封建制度を意味した。

彼によると、「火薬の効用 頗に著明ナリシハ、千四五百年ノ間」であった。当時「欧州諸邦ハ封建ノ世」で、

1. 侯伯各其城邑ニ割拠シテ国王ノ命令一モ行ハレズ。戦乱紛争止ム時ナン。
2. 故ニ壮者悉ク兵トナリテ戦役ニ服セザルヲ得ズ。
3. 就ヲ制シテ兵器トナン、直チニ起テ戦役ニ服スルヲ以テ物皆兵器ニアラザルハナク、人悉ク兵士ナラザルハナン。
4. 斯ノ如ク人々兵事ヲ以テ常識トナン、战斗ノ外為ス所ナクンバ、平和ノ業務ニ従事

スルヲ得ザルナリ⁴⁹⁾。

という状況であったという。所が「火器ノ効用」があらわれ、

人々皆兵士トナルヲ要セズ、有為ノ壮丁争フテ平和ノ事業に就クヲ得タリ。……(又)兵士ノ数ヲ減却シ、戦乱ノ局ヲ短縮シ、紛争ノ惨毒ヲ軽減シ、戦争ソノ物ヲシテ大ニ昔日ヨリ減少セシメタルハ火器ノ功ニアラズシテ何ゾヤ。……即チ欧州諸邦ノ封建全ク互解シタルノ時ナリ⁵⁰⁾。

と欧羅巴封建制度の崩壊をもたらしたのが「火器」の出現であったとする。ところで、日本の場合封建制度の崩壊は、

我邦ノ封建ヲ排破立ルモノハ攘夷説ナリ。勤王説ナリ。或ハ政府ノ法令ナリト思フハ抑モ惑ヘリ。前ニ論ズルガ如キ効用ヲ有セル火器ノ進入シテヨリ封建ノ制度ヲ襲撃シ其秩序階級ヲ打壊シテ今日アラシメタルニアラズヤ⁵⁰⁾。

と述べ、その「火器」の「効用」つまり自然科学技術や智識そのものの功力が封建体制打破の力となったと言う。

愛山は火器が封建体制の建設に役立つと述べ、茂吉は崩壊に役立ったと対立意見を述べている。

この両者の意見の正否はとも角として、ここに江戸期洋学（西洋科学技術）の導入に対する決定的差異（捉え方の差異）が示されている。その重要な一つの点は愛山と茂吉の捉える科学技術への捉え方の異である。愛山は「近世物質の進化」とほぼ時を同じくした「科学」において、

年しき年月は確実なる経験を生む。学説は時として中らざることあり、されど経験は毫末も違はず理論は人をして迷はしめ経験は人をして信ぜしむ⁵¹⁾。

と「学説」よりも「経験」を重視した。また

高遠なる科学を修めて自ら多識を誇るも民生の实用に於て何の効なくんば……学んで当世に用なくんば不学にして田畝に耕するものの賢れるに如かざる也⁵¹⁾

と「民生の学」を重視した。そして、「予は科学を敬す。之を敬するが故に余は広く其経験をとりて之が基礎を堅ふせんことを希望するのみ」とこの文を結んでいる。

茂吉の『文明東漸史』は前節でも述べた如く文明の新学説が内部「人心」を動かし、思想を生み、社会を変革する力となったとした。その際「火器」「蒸気機関」が生産社会（機構）の変化を直接に生ぜしめるというより、「封建制度ハ人智ノ発達ヲ妨害スル」もので、これに対して「流レニ逆シテ」も対決するものという新智識人の学問的集団の形成という形で受けとめた。茂吉が「尚齒会」に注目し、華山長英の行為に異常な賛美を与えたのも理由はここにあった。これに対して愛山は外来科学技術が生活者（平民）の日常生活の中で経験的智恵と融合発展する事を注目した。

愛山のこの把え方は同じく明治24年～25年にかけて出版された竹越与三郎の『新日本史』が、「社会自身の大変革は実に学問智識の一点より始めり」とし「実学の進歩、物質的变化、理化学の新説」をその下巻で目論みながらも完成刊行しなかった空白を埋めるものであったと考えられる。

5 「洋学」観転換の意味

茂吉が自由民権運動期において、立憲改進黨のイデオログの一人であった事は周知の通りである。立憲改進黨は明治15年3月に趣意書を發表し4月16日東京で結党式を挙げた。その時の党の構成者は、

東京在住の元官僚、新聞記者、代言人、学校教員などの知識人層が大半を占めていた点に特長があった⁵²⁾。

と言われている。つまり都市知識人に母体があった。茂吉が『文明東漸史』で「蘭学ヨリ発生セル新智識、政治ニ波及セル新思想」を力説し、そうした智的集団たるものとして「尚志会」を把えた因の一つはここにあった。

ところが、自由民権運動が終熄しはじめた明治20年前後時代風潮の転換が生じた。同時代の史論家竹越与三郎が「天下己に智力の時代に飽き、将さに感情の時代に入らんと(する)⁵³⁾」と把え、同じく民権運動中自由党の党首であった板垣退助が渡欧後、「我国政治社会の旺盛は生活社会を圧倒して其をして退縮萎靡せしめたるものと云わざるを得ざるなり」「生活の必要ありて然る後に政治の用あり、是れ則ち自然の定則なり⁵⁴⁾」と人民の「生活社会」建設を強調する状況になった。

板垣の発言を受け継いで徳富蘇峰は明治19年の緒言をもつ『将来之日本』で、
今ヤ(欧州の)生活社会ノ進歩ヨリシテ政治社会ノ進歩ヲ促シ、経済世界ノ交際ヲ以テ政治世界ノ割拠ヲ打破リ、生産機関ヲ以テ武備機関ヲ顛覆スルハ早晚避ク可ラザルノ命運ト云ハザル可カラズ⁵⁶⁾。

と「生活社会」の進歩の必要性を説いた。この蘇峰の「生活社会」への開眼は、それまで明治開化期を導き出し、明六社同人として啓蒙活動を行ってきた人達(福沢諭吉、西周、中村正直等)を「天保の老人」—彼等は天保にはじまる幕末に洋学者として自己の進路を定めていた—と呼び「天保の老人より導かるるものにあらずして天保の老人を導くもの」であるという「洋学者」への批判に依拠したものであった。

こうした蘇峰が、

君が明治二十年、静岡より始めて書翰を東京なる予に投じてより以来、大正六年其の死床に予の手を握りて、最後の息を引き取る際まで、予を以て与に議す可き一人となせり⁵⁷⁾。

としたのが山路愛山であった。愛山に「平民社会は自営自活の社会なり」と「平民生活社会」への視座を与へたのは蘇峰であり、また時代の転換でもあった。

さて、愛山の洋学観がかかる明治20年代の思想状況をも反映して、江戸期における平民の生活のレベルで外来科学技術を扱えた事はいま一つ明治における外来科学技術の導入とその様相への新たな意味づけを示した。前節において近世における鉄砲の導入が封建社会組織に「大変動」を与えた事の延長線上で、明治の「蒸気、電気を大機械大製造に応用」した社会変動を思考していた点にふれた。

彼は「蒸気、電気を大機械、大製造に応用する」明治20年代にはじまる産業革命という「大変動」を「此進歩は恰も鉄砲の発明が武士を城下に集めたるが如く労働者を工場に集めたり⁵⁸⁾」と類推した。この根拠を、

元亀天正の昔、鉄砲と云ふもの外国より渡り来りし結果は武士各々其領地に土着すること能はず。いづれも其盟主たる大將の城下に集まり、此に封建の形を生じた⁵⁸⁾。

ところが、この「大都会」たる城下町には、「町人の階級を生み」後には「町人の階級逆まに武士を制するの勢」となった。というのは、武士が都市移住後、その生活（衣・食・住）のため各領土の「土民の力」を借りた。しかしこれには経費がかかり、「都会に育ち万事慣れたる人物」を用いる事となった。しかしこれらは、「去来進退自由自在にして恰も人は尽く主人なり」という状況になった。これに比して、「今日の労働者の階級」はどうか。

今は工場に入り、工場の役人に使命せられ其役人も弁当箱をさげて工場に出入する傭人にして時々変化あり。……一廉の職人となれば工場は多し、需要はあり、天下の工場悉く我が働くべき場所なり。……斯くて労働者階級相互に自ら声息を通じて、逆まに工場主を制せば其状恰も昔の町人が財利の権を仮りて武士を制し主客の位置を顛倒したるに同じか⁵⁹⁾。

と扱えた。ここで愛山は「労働者の同盟を破壊」すべき事という立場はとらない。彼は、元来労働者をして此に至らしめたるものは大工場の起りたる結果にして、大工場の起りしは応用科学の進歩上己むを得ざるの勢なれば何人も之を古に復すべき道なからん。天下の勢一変すれば比勢に応ずるの道を講ぜざるべからず⁵⁹⁾。

と科学技術の導入による産業社会の進展とそれに対する「道」を提唱した。この「道」が「新道德の建設」というもので彼の『社会主義管見』にもみえる「共同生活」体としての「国家社会主義」につらなるものであった。もっともこうした愛山の思想は明治30年代の後半に属するものであるが、その崩しはすでにみた如く20年代に萌していた。愛山にみられる「物質的文明の進歩」→「器械工業の発展」→「社会変革」→「社会問題の提起」という認識は同じく同時代の酒井雄三郎（1860～1900）においても明確に扱えられていた。

明治23年の「社会問題」では、「大工場」を中心にする「製産社会」の中に「資本と労力との間の激烈なる争闘」を注目し、明治27年の「新旧社会主義」の序では、

器械工業の発達と共に、物質的文明の進歩と共に、抑も又人権平等の大義漸く世に明かなると共に社会旨義の勢力益々その強大を加ふるに至るは良に必然免るべからざるの理勢⁶⁰⁾

と把えた。こうした彼の認識は後に、「社会問題と近世文明との関係に就きて」という論考に集約され、「近世文明」（ここで「近世」とは近代を指す）が「与えたる生産器械の急劇繁忙なる運転」の「自由競争の理法」「需要供給の定則」が今や「その己に工業界を侵寇したる余勇を鼓して更に農業界に侵寇し来る」状況を具に観察するに至っている。

以上の如く、明治期の洋学観は大きく20年代をもって科学主義から生活主義に転換すると共に、それが日本における工業社会の生活への自覚と平行関係にあったことがわかるのである。この事はもはや「洋学」が「洋学」としての特性を示さなくなりつつあった事をも意味する。三宅雪嶺がやや後れて『明治思想小史』で、

和文学と漢文学を除けば他は悉く洋学の範囲に入ったやうであるが、洋学とは西洋の語を学び語を借りて知識を得ることである。既に知識を得れば如何様でも宜い。……之を取り入れたからは水の低きに就くが如く次第に平均化して来た。……それで洋語を学ぶは外国語学校の事とし……洋学の名も無用に帰し、何時しか消滅してしまった。今は和漢洋といへば如何にも古めかしく聞える。

と述べたのは、いみじくも「洋学」の時代的終熄を物語っているように考えられる。

注

- 1) 『季刊日本思想史 16』41～55頁、ベリかん社、1981
- 2) 173頁、中央公論社、昭55.11
- 3) 岩波文庫本、88頁
- 4) 『日本古典文学大系 95』松村明解説、453頁～、岩波書店、昭39
- 5) 岩波文庫本、181頁
- 6) 同上、199～200頁
- 7) 『福沢全集 V』、167頁、国民図書株式会社、大15
- 8) 同上、182頁。なお、この文は「藤原惺窩林羅山等の諸先生が専ら文学を首唱したるは必ず世間の耳目を驚かしたること」と並べられている。
- 9) 『福沢全集 X』、26頁、前掲書
- 10) 同上、30頁
- 11) 『福翁百話』、261頁、角川文庫本、昭40
- 12) 同上、262頁
- 13) 『福沢全集 X』、416頁、前掲書
- 14) 『明治史論集 (-)』、226頁、筑摩書房、昭40
- 15) 「『文明東漸史』の精神史的構造」、『歴史と文化』所収、岩手大学日本学研究室、昭55
- 16) 『崑山・長英論集』、19頁、岩波文庫本、1978
- 17) 同上、388-389頁、佐藤昌介氏解説
- 18) 同上、230頁

- 19) 同上, 240 頁
- 20) 同上, 234 頁
- 21) 同上, 226 頁
- 22) 同上, 154 頁
- 23) 同上, 195-196 頁
- 24) 前掲本, 248 頁
- 25) 同上, 249 頁
- 26) 同上, 250 頁
- 27) 同上, 267 頁
- 28) 同上, 285 頁
- 29) 同上, 246 頁
- 30) 同上, 246 頁
- 31) 福沢は『民情一新』で明確に「利器」が社会変革をおこさせるとし、「利器を用ること愈巧なれば権力を得る事愈大なり」と「人民の心情」が「彼の利器に乗じて」やがて「政府」との対立をみるであろうという。第5節参照。
- 32) 『徳富蘇峰集』, 20 頁, 「現代日本文学全集」, 改造社, 昭5
- 33) 同上, 24 頁
- 34) 同上, 403 頁
- 35) 同上, 443 頁
- 36) 『日本科学技術史大系 1』, 493 頁, 第一法規出版, 1946
- 37), 38) 同上, 494 頁
- 39) 同上, 496 頁
- 40) 同上, 524 頁
- 41) 同上, 525 頁
- 42) 例えば家永三郎氏「啓蒙史学」『日本歴史講座 八』, 155 頁, 東大出版会, 1963
- 43) 『山路愛山集』, 267 頁, 筑摩書房, 昭40
- 44) 同上, 426 頁
- 45) 同上, 269 頁
- 46) 同上, 270 頁
- 47) 同上, 271 頁
- 48) 同上, 83 頁
- 49) 前掲書, 247 頁
- 50) 同上, 248 頁
- 51) 前掲書, 259 頁
- 52) 『体系日本史叢書 政治史 III』, 203 頁, 山川出版社, 昭44
- 53) 前掲『明治史論集 (-)』, 168 頁
- 54) 『自由党史 三』, 649-670 頁, 青木書店, 1955
- 56) 前掲『徳富蘇峰集』, 81 頁
- 67) 前掲『山路愛山集』, 415 頁
- 58), 59) 同上, 82-83 頁。なお, 福沢は注 31) に記した如く, 「利器」が社会変動を生ぜしめる因と見る。一方「(今日) 英国ノ風俗ノ如キ……民情変化ノ徴候ヲ顕シ役夫ノ輩ガ「ストライキ」トテ仲間テ結約スル……異常」を将来日本のことと受けとめたが, そうした彼の認識を江戸洋学観に適用しなかつた。
- 60) 『社会文学集』, 37 頁, 「現代日本文学全集」改造社, 昭5 61) は同左 73 頁以下。
- 62) 『三宅雪嶺集』, 236-237 頁, 筑摩書房, 1975

本稿は『生活学 七』(1981.12.ドメス出版)所収の拙論「日本における生活意識と人間性の関係 二」と相俟って, 昭和56年度文部省科学研究費総合研究分担課題「生活意識と実学」の研究成果の一部を形成している。

(昭和56年9月16日受理)